



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2019年 9月号

「生きるということ」

牧師・園長 長村亮介

「水の星」

宇宙の漆黒のなかを
ひっそりとまわる水の星
まわりには仲間もなく親戚もなく
まるで孤独な星なんだ

生まれてこのかた
なにが一番驚いたかと言えば
水一滴もこぼさずに廻る地球を
外からパチリと写した一枚の写真

こういうところに棲んでいましたか
これを見なかった昔のひとは
線引きできるほど意識の差が出てくる筈なのに
みんなわりあいぼんやりしている。

太陽からの距離がほぼほどで
それで水がたっぷり渦まわるのであるらしい
中は火の玉だっというのに
ありえない不思議 蒼い星

凄まじい洪水の記憶が残り
ノアの箱舟の伝説が生まれたのだろうけれど
善良な者たちだけが選ばれて積まれた船であったのに
子々孫々のていらくを見れば この言い伝えもいたって怪しい

軌道を逸れることもなく いまだに死の星にもならず
いのちの豊饒を抱えながら
どこかさびしげな 水の星
極小の一分子でもある人間が ゆえなくさびしいのもあたりまえで

あたりまえすぎることは言わないほうがいいのでしょう

(茨木のり子)

私は「あり得ない不思議 蒼い星」に棲んでいるとい
うのに、せっかくの命をさびしく生きていることが少な
くありません。でもそれだけですと「ゆえなくさびしい
のもあたりまえで あたりまえすぎることは言わないほ
うがいいでしょう」と結ばれているように、その言葉
はつまらない愚痴です。しかし愚痴ではない言葉があり
ます。「孤独」です。作者がこの地球が孤独なのだから、
その一分子の如く棲む人間が「孤独」なのはあたりまえ
ではないかと言っているのを、私は潔いと思います。

人間は孤独な時にこそ本当に生きている、心の思いが
深まるのではないかと思えます。心の思いが深まるとい
うのは、言葉が豊かになるということです。誰かと話し
ている時の言葉は意思伝達の道具でしかなく、どうして
も表面的で、言葉を尽くすことは叶いません。しかし心
中で自分の言葉を反芻する時、普段の自分の言葉が広が
りを見せ、深まり、醸成されるのです。別に難しい言葉
が使えるようになるとかではありません。時には言葉に
ならない言葉、思いと言葉のあいだもありません。耳を澄ますと、
かすかに心の底から聞こえて来るような言葉があります。
そして生きるということの真意は、この「蒼い星」
から発せられる、心の言葉を聞くことなのではないだろ
うかと私は思うのです。

「あり得ない不思議 蒼い星」はあり得ないのに、こ
こに確かに在ります。そこに在り得ないものを存在させ
る根拠があるからです。在り得ないことを存在させる根
拠、それが神さまです。私の存在の根拠も、そこにあり
ます。心に聞こえる思いは、時に言葉にならないことも
少なくありません。恐らく孤独と言葉は、辛い時や悲
しい時が多いからでしょう。そして信仰があるというの
は、その孤独の只中に神さまがおられることを知ること
です。聖書に使徒パウロは、次のように言います。

「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、
「霊」
自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してく
ださるからです。」(ローマ八・二六)